



教師も育つ学校を目指して

館山市立北条小学校校長 あんどう 安藤 みかこ 深佳子



1 はじめに

本校は終戦直後に校長となった和泉久雄校長の「教科あって教育ありではなく、生活あって教育あり」という考えの下、「生活の中で生きて働く力を育むという方針や子供の思考の特質を重視し、子どもが自ら求めるものじょうくり取り組み、自分なりの達成感をもつに至る過程や、人との関わりや共感を育んでいく過程にずっとこだわり続け、また大切にしてきた学校」である。

教育目標は、「たくましく現代に生きる子どもの育成」である。この目標を掲げ、既に60年は経った。現代観やたくましさを捉えは時代に合わせて変わり、目標に古さを感じることはない。昨年度、創立150周年を迎え、学校の歩みを振り返る機会を得たとともに、全校が気持ちを新たに未来に向けて進んでいくことを確認した。

今回、執筆の機会を頂いたので、学校教育目標を具現化していくために特に大切だと考えている「人」「プラン」「学年経営」について述べたい。

2 一丸となって進む職員集団

学級担任の頃は、学級の子供たちが誇りであった。校長となった今は、毎日一緒に奮闘している職員が誇りである。どんな時も子供たちのために精一杯努力する職員である。時には、ベテラン職員がビシッと言うこともあるが、声を掛け合って助け合い、また、頑張っている職員を認める風土がある。職員集団の

もつ雰囲気は、学校の玄関を一步入れば自ずと伝わる。

本校の職員集団は、物事が徹底する集団だと言える。だから、学校教育目標具現化への取組についても、学校全体で協力して進められるのである。物事が徹底できることは、決して当たり前ではない。言われるからやるのではなく、一人一人が物事の背景や真意を理解し、前向きに取り組んでいるのである。

本校には、職員を育てるための言葉がある。二つ紹介する。

- ◇分担に耐え、分担に生き、分担を超える
- ◇あなたの香りのする授業を

意味を詳しく説明されたことはない。自分で考えるのである。

3 学校の核としてのプラン

本校では、北条小学校教育計画のことを北条プランと呼んでいる。昭和20年代に生活教育を重視したコア・カリキュラムを公開し、それが北条プランの始まりである。プランは実践（研究授業や通常の授業）を通して、授業者の工夫や反省が加えられ、毎年新しいものにリニューアルされている。

プランはカリキュラム管理室の660の棚に収納されている。棚は学年、教科、月別になっており、実践者の反省が書かれた単元計画の他、ワークシートや資料、板書写真等、過去から現在に至るまですべてが収められている。つまり、「あなたの香りのする授業を」と言われた多くの実践者の指導記録が蓄積されて

いる。このプランを改善、開発していくことが学校の使命である。



カリキュラム管理室にある660の棚

職員は、プラン（P）を参考に一人一実践以上、研究テーマに沿った授業を展開（D）する。細案を書き、研究グループで何度も検討を重ね、人によっては模擬授業から本時、検討（C）後の授業と、同じ時間を3回展開する。このようにして、指導力を身につけていくのである。そして、この過程を経て、プランが修正、改善（A）され、次年度（P）のプランが作成されるという流れが確立している。

4 機能する学年経営

「本校には職員室がありません。学年室があります。学年経営を主体としているからです。」と、訪問者に説明する。現在は学年3クラスとなり、学級数は多くないが、学年の考えや主体性を尊重している。

毎週金曜日を学年会の日とし、授業の進捗や学年行事等について確認、検討している。学年職員は経験の長短に関わらず、いくつかの担当する教科のプランについて提案し、今後の学習指導をどう進めるか話し合う。時には先行して授業を進め、自身の板書を提示して授業案を説明する場合もある。

学年会で話し合われた学年の取組は、学年主任会（月1回）で提案される。もし、さら

に検討する必要がある場合は学年に持ち帰り、改善したものを職員会議で再提案しなければならない。例えば、最近では市内音楽会に向けた「音楽壮行会」について、担当の3学年職員から提案があった。学年主任会で時程の修正が図られ、3学年児童の発表の他に、全校で今月の歌を歌うことなどを確認した。当日は約600人が体育館に集まり、始まりの時間を静かに待つことができた。そして、学級で練習してきた歌声を体育館に響かせた。学年の思いを大切に、全校が協力するのである。

また、本校には特別支援の学年（特学年）がある。11名が（特別支援学級8、通級指導教室3）メンバーである。全児童数は減っているが、特別支援学級数、在籍者数は増加傾向にある。本校において、特別支援教育の充実は学校経営の大切な柱の一つである。特学年室では、職員同士の相談や助言が日常的に行われている。アセスメントの方法や個別指導計画の立て方、関係機関の情報など特別支援教育担当として必要な知識や技能を共有し、必要に応じて全体に発信されるなど、まさに学校における特別支援教育の拠点となっている。

5 さいごに

本校なりの仕組みや考え方の一端を紹介させていただいたが、これらは長い歴史の中で脈々と引き継がれてきたものである。

一方で、学校のシステム化はとても大切なことであるが、システムを生かすための人（職員）が何より肝要であることは言うまでもない。子供も育つが、教師も育つ。そんな学校でありたい。

何十年も働いてきた今、学校は、「子供たちのために」と心を一つに学校教育目標の具現化に向かって働くことのできる、素晴らしい職場だと痛感する毎日である。



職員が一つになる 学校づくりを目指して

県立松戸特別支援学校教頭 なかやま 中山 ただし 忠史



教頭の職務は、県立特別支援学校管理規則では、「校長（副校長を置く学校にあっては、校長及び副校長）を助け、校務を整理し、及び必要に応じ児童生徒の教育をつかさどる。」とある。この文言は管理職選考を受ける際に、頭にたたき込み臨んだ。しかし、この文言が示す内容については、正直理解しているとは言いがたく、教頭になれば分かるのだろうという程度に考えていた。

実際に教頭となると、忙しい日々が続く。毎日のように「教頭先生ちょっと良いですか」と質問や相談を受ける。教頭として最初に着任した学校は、校舎が本校と分校とに分かれており、それぞれに一人ずつ教頭が配置されている学校である。私は本校に所属し、校長と一緒に勤務していた。校舎内には、教頭は私一人なので、全て私に対応することとなる。着任したばかりで、学校の状況や生徒たちについて知らないことなどはお構いなしだ。隣に座る教務主任からいろいろと教えてもらうが、対応に追われ、目が回るようであった。さらに、年度の初めは、事務業務が多忙を極め、大量の校内向けの文書作成、教育委員会への提出書類、調査の回答作成などの業務がある。始業式を迎え、子供たちが登校してくれば、急遽対応が必要な事案が発生し、対応に追われ、仕事を処理したはずが、新たな仕事が増える印象である。何とか懸命に業務に集中して処理を進めていると、校内の状況について校長への報告が漏れ、「聞いていない」と説明を求められることもあった。なかなか

教頭としての職務を果たしていないと感じる日々が続き、頑張っているつもりだがと弱気な思いで気持ちが傾きかけている私を支えてくれたのは、同じ学校の職員であった。疲れている私を気遣い、「教頭先生がいなくなったら困りますから」と手伝ってくれることもあり、感謝の思いがあふれた。

学校経営を担っていく上で、管理職は一人一人が働きやすい環境を作り、必要に応じて職員に助言し、より良い学校作りに向け、牽引していくものだと考えていたが、お互いに支え合うことの大切さを学ぶことができた。職員が、今どんな業務を行い、どんな悩みを抱えているのか、どんな教育を目指し努力しているのか、話をしていくうちに学校の状況が分かるようになった。生徒たちの課題について一緒に考えることで生徒たちの様子を理解することにつながり、担任ではなくなったけれど、目指していくことは変わらないと気がつくことができた。むしろ担任だった頃は、かかわるのは自分の学級の生徒たちのみであったが、教頭は学校に在籍する全ての生徒たちにかかわりを持つことができるのだと喜びを覚えた。校長が示す学校教育目標の達成に向け、職員並びに生徒たちに影響力を発揮するのが教頭の職務であることを感じた。

年度の初めには、必ず校長から学校教育目標について説明があり、その実現に向けて職員一同が力を合わせて学校運営に当たっていく。校長と目指す学校像や抱える諸課題について話をすることで、学校教育目標で掲げて

いる内容を深く理解していく。教頭は、教育目標の実現に向け、校務分掌の見直しを行い、職員に対して積極的に働きかけていく。どのように行っていくか具体的な案を抱えて校長と相談し、進めていくが、これからの学校について話をしていくと学ぶことが多く勉強になる。印象的なやり取りは、校長が「日本一の特別支援学校にしたい」と強く語っていたことである。その学校は若い教員が多く、授業研究協議会などで授業を見ても改善点も多く見られることもあった。しかし、その校長は、教員の良いところを評価し、成長していけば良い授業ができる、良い教師になっていくと考えていた。確かに熱心な教員や、児童生徒たちに熱意を持って接している教員も多く見受けられた。教員と一緒に授業作りに取り組み、校長の指導の下、日本一の学校にしていくという強い気持ちになることができた。

現在の勤務校は、教頭としては3校目になり、3校で4人の校長と一緒に仕事を行った。学校経営の進め方は校長によって異なるが、自分とは異なる視点や課題に対するアプローチの仕方など様々であり、自分の考えを広げることができる。教頭としての自分の案を持ち、校長室へ行き、相談することで話が膨らみ、盛り上がることも多々ある。こんな学校にしていきたいという思いを管理職同士で共有していくことで、全職員にどのように伝えていけば良いかも見えてくる。

特別支援学校の職員の職種は多様である。管理職、教諭、栄養職員や事務職員の他に、看護師、スクールバスの介助員、調理員、学校技能員など、様々な職種の方が協力して子供たちの成長を支えている。考え方も様々だが、皆さん、大切にしている思いは同じである。しかし、異なる働き方、考え方の職員を

学校教育目標という一つの目標に向けて力を合わせていくというのは容易ではない。職員の思いをつないでいくのは対話である。職員一人一人とコミュニケーションを図り、意見を聞くことで考えを理解し、尊重し合える関係になっていくのだと感じる。また、職員数も多く、多様な職種の方がいると、求められる対応も複雑になることもある。職員から質問を受け、詳しく状況を聞いてみると、すぐには回答できないこともある。千葉県教育関係職員必携のページをめくり、インターネットを活用し、根拠を持って説明ができるようにするため資料を集めながら調べる。納得いく答えを見つけることができると、胸にストンと落ち、気持ちの良さを味わうことができる。日々勉強の積み重ねの大切さを実感する。

教頭は、本当に、忙しい日々で業務に追われるが、追われるだけでなく、職員との対話を大切にしていくことが重要である。教頭の考えや意図が、液体のように学校全体、職員の隙間に染み渡らせることができれば、職員同士をつなげ、一つの柱となり学校を支えていけるようになるのではないだろうか考える。私は、常々、学校というのはオーケストラと同じではないかと感じている。指揮者のタクトに合わせ、様々な音色を奏でる楽器を演奏することで素晴らしい音楽を響かせるのと同じように、校長がタクトを振り、様々な長所、得意とする専門性を有した職員が存分に力を発揮することで、特色ある学校の姿、高い専門性を発揮した教育力を見せることができるのではないかと考える。教頭である私は、そのプロデュースを行い、職員全体が力を合わせて学校づくりに励むことができる一つのチームとなるように、日々、学校の中を走りながら邁進している。



教務主任としてできること ～「チーム中根」を合言葉に～



いすみ市立中根小学校教諭 **岩瀬 和也**

1 はじめに

本校はいすみ市の北部に位置し、周囲には田畑が広がり自然豊かで、静かな環境にある。全校児童は88名で、保護者や地域の方々に温かく見守られて学習活動に取り組んでいる。

本校5年目、教務主任としては2年目になる。ミドルリーダーとして、組織（チーム）をつくることの難しさと重要性を感じている。校長のリーダーシップのもと、「チーム中根」を合言葉に全教職員で教育活動に取り組んでいる。

2 教務主任としての取組

(1) 学力向上に向けての取組

① 学校全体で統一した学習規律

学級担任の半数が20歳代、30歳代で、経験年数も浅い教員が多い。学校規模が小さいため、各学年単学級であり、初任者であっても学年主任になる。学習指導において、若手からベテランまで、大切にしなければならないこと（学習規律）を学校全体で確認し、統一して取り組むこととした。そこで、中根小学校「学びの5つのルール」「ノート書き方」を作成し、全校で取り組んでいる。

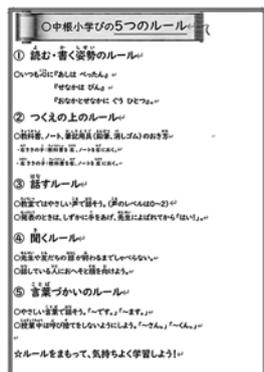


図1 学びの5つのルール

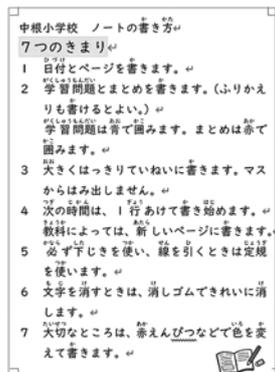


図2 ノートの書き方

② 授業について（みんなで取り組む授業改善） (ア) 令和5年度全国学力・学習状況調査問題分析（5月）

児童の調査終了後、全教職員に調査問題を配付し、問題を解いた。そして、正答率が「高い問題」、「低い問題」がどれかを予想し、アンケートフォームを使い、回答を集めた。その結果を分析し、出題の意図、児童に求められる力について、全教職員で考えた。

国語では、「読み取った内容を理解し、問題の言葉や自らの言葉でまとめる力」「自分の考えを文章に表す力」が求められている。また、算数では、「日常生活に置き換えて考える力」「自分の考えを説明する力」「複数の資料から必要な資料を選んで答えを求める力」が求められていると考えた。これらの力を、授業で身に付けさせていくことが望まれていることだと共通理解した。

(イ) 「中根小授業改善のためのセルフチェックシート」の活用

千葉県教育委員会から推進されている『『思考し、表現する力』を高める実践モデルプログラム』をもとに「中根小授業改善セルフチェックシート」を作成した。「授業づくりの視点」「自身の授業を振り返るための視点」「授業参観の視点」として活用している。セルフチェックシートは「STEP 1」「STEP 2」「STEP 3」の3種作成して、段階的に少しずつ改善できるようにしている。月に1回活用し、週案に綴じこみ変容が分かるようにするとともに、シートを活用し、授業を行う全教職員で授業改善に努めている。また、本校で

は、授業づくりの合言葉を「中根」の文字を用い、「な」㊦んだらうと問いをもち、「か」自分で㊦んがえて、㊦んがえは広げて深めて友達と、「ね」㊦らいが根付くようにとして取り組んでいる。

(2)働き方改革の推進

①退勤時刻申告シートによる意識改革

出勤札、出勤簿の近くに退勤時刻申告シートを掲示し、自分の名前が書いてあるマグネットで知らせるようにしている。これは、勤務時間を意識付けることを目的としている。「〇〇先生は、今日5時までだ。」と全教職員が分かるようになっている。管理職も「〇時までがんばろう。」「〇時にみんなで退勤しよう。」と職員に声を掛けやすくなっている。

②職員会議資料のペーパーレス化

これまですべて印刷していた職員会議資料はデータ共有にし、印刷・綴じこみの時間をなくした。また、データは共有フォルダを使用し、PDF化しているので、事前に資料の確認ができるようになった。そのため、事前に読み込んだ上で会議を行うことができるので、会議時間の短縮にもなっている。さらに、データを確認し、会議を進めるときに修正が必要な場合は、その都度修正ができることも時間短縮になり、作業効率が上がっている。

③アンケートフォームを活用した欠席・遅刻連絡

これまで児童の欠席・遅刻の確認は、主に電話対応であった。多い時には10件以上の対応もあった。朝の慌ただしい時間帯の電話対応は改善が急務であった。そこで、欠席・遅刻の確認にアンケートフォームを活用した。すると、朝の電話対応がほぼなくなった。ここで生み出された時間は、児童の指導に当てられるようになった。

また、インターネットの環境があれば、教室にいても担任は遅刻・欠席する児童の把握

ができるようになった。そのため、職員室へ行き来することや内線でのやり取りすることを減らすことができた。



図3 アンケートフォームによる遅刻・欠席 連絡

(3)フットワーク軽く動く

教務主任は、教職員と管理職をつなぐ立場である。そのため、学校の現状を把握し、課題解決できるように、フットワーク軽く動くことを意識している。

職員室で仕事をしていると、学級担任から援助やアドバイスを求められることがある。そのような時は、すぐ教室に行き、解決できるようにしている。そして、管理職への報告・相談・連絡を迅速、丁寧、確実にすることも大切にしている。また、若手の教職員から教科指導、生徒指導に関する相談もある。その際は助言するだけでなく、実際にやってみせることを大切にしている。

共に取り組むことで信頼関係が生まれ、チームとして機能できるようになっている。

3 おわりに

校長・教頭をはじめとする教職員に支えられ、現在の職務ができています。これからも、教職員のつながりを大切にして、「チーム中根」の中核となり、学校を動かすことができるようにしたい。さらに研鑽を積み、職務に邁進していく所存である。



自ら思考し、 表現する力を高める取組



松戸市立第五中学校教諭 いしかわ まさる
石川 賢

1 はじめに

数学の教員になってから今日まで、授業をしていてずっとテーマにしていることがある。それは、「授業で考える力を生徒にどう身につけさせるか」ということである。現在の評価でいうところの「知識・技能」の力に関しては、たとえば、計算問題や数学の用語などを問う問題を、授業の始めに5分程度小テストのような形式で毎回くり返し行えば、どの生徒にもある程度力が身についたと感ずることができた。しかし、「思考・判断・表現」の力に関しては、どのような方法で授業を行えば、生徒に力を身につけさせられるか具体的な方法がすぐには思いつかず、様々な方法を実践してもなかなか手応えを感じることができなかった。そうした中で、今現在も「考える力」を生徒に身につけさせるために様々な取組を実践している。



2 現在行っている取組

(1)「なぜ」と問い返す場面を意図的につくる

なぜ「考える力」が生徒に身につかないのか考えたときに、計算力をつけさせるときと同じように毎回の授業で力をつけさせる取組を行っていないからだ気づいた。しかし、方程式の文章題のような問題を、毎日小テスト形式で行うのは時間的にも難しい。そのため、毎回の授業で生徒に自分の考えを発表させる場面を意図的につくるようにした。たとえば、1年生の文字式の授業で、式の値という学習内容がある。この授業では、生徒とのや

りとりの中で、以下のようなやりとりを行い、生徒に自分の考えを発表させるようにしている。

教師 “ $x = 2$ のとき、 $3x$ の値はいくつですか。”
 生徒 “6 です。”
 教師 “なぜですか。”
 生徒 “ $3x$ は $3 \times x$ のことなので、 $3 \times 2 = 6$ になるからです。”

このようなやりとりをほぼ毎回の授業で行うことで、まずは口頭で説明することが少しずつできるようになっていく。そうすれば、生徒がテストでも正しい解答を記述できるようになると考えた。しかし、ただ発表させるだけだと、発言する生徒に偏りが出てしまうため、指名した生徒が説明したり、グループ学習を取り入れ、生徒同士が自分の言葉で説明したりする場面をつくっている。

(2)生徒に記述をさせる

「なぜ」と問い返す場面を意図的につくることで、ほとんどの生徒がある程度口頭で説明することができるようになったが、テストの記述式の問題を見てみると、正しい解答にたどり着く生徒の数にあまり変化はなかった。そこで、次に考えたのが、生徒に授業の中で記述をさせることだった。現在の評価の観点にある、「主体的に取り組む態度」を評価するために、授業の振り返りを生徒にさせている先生方も多いと思うが、授業の進度もあって十分な時間がとれなかったり、宿題になっていたりしていないだろうか。実は自分もそ

うである。そうすると、取り組まない生徒は全く取り組まないのので、自分の考えを記述する機会がなくなってしまう。そのため、授業の中で生徒に自分の考えを記述する場面をつくるように意識して授業を行っている。たとえば、1年生の方程式の授業で、等式の性質という学習内容がある。この授業では、以下のようなプリントを使って授業を行っている。

問題 右のようなつり合っている天びんについて、次の問いに答えなさい。



① 左側の皿に1円玉を3枚のせたとき、天びんがつり合うためにはどうすればよいでしょうか。

② 左側の皿から1円玉を2枚取り除いたとき、天びんがつり合うためにはどうすればよいでしょうか。

③ ①、②から考えると、左側の皿にあるものを2倍に増やしたとき、天びんがつり合うためにはどうすればよいでしょうか。

④ ①、②から考えると、左側の皿にあるものを半分に減らしたとき、天びんがつり合うためにはどうすればよいでしょうか。

◇ ①～④のことを等式に置き換えて考えると、どんなことがいえますか。

記述をさせるとなると、難しいことのように感じてしまうかもしれないが、簡単なことでもよいので、まずは記述をさせることが大事だと考えている。プリントでは、等式を天びんに見立てて、等式の性質を見いだすという内容だが、プリントの①から④のような簡単な問いでもよいので、とにかく生徒に記述をさせる。小学校や中学校の理科の授業で天びんを使ったことがあるため、①であれば、“右側の皿にも1円玉を3枚のせる。”のように、ほぼ全ての生徒が書くことができた。そして、最後に◇のところに取り組むのだが、ここで数学に帰着させる。ここでも、“ある数を左側にたしたり、ひいたり、かけたり、わったりしたときに、同じ数を右側にたしたり、ひいたり、かけたり、わったりすれば、等式が成り立つ。”のように、これもほとんどの生徒が自分の言葉で書くことができた。また、

その際に、テストで正しい解答を記述できるようにするため、左側を“左辺”、右側を“右辺”のように、数学の用語を使って記述するよう指導している。

(3)全国学力・学習状況調査を活用した授業

3年生を対象に毎年行われる、全国学力・学習状況調査。その結果を数学科の教師で毎年分析して報告していると思うが、“短答式や選択式の問題の正答率は平均と同じぐらいだが、記述式の問題の正答率は平均を下回る。”という報告が多いのではないだろうか。記述式の問題の正答率を上げるため、様々な手立てを考えるのだが、これがなかなか難しい。なぜならば、全国学力・学習状況調査で出題される記述式の問題は、出題形式が少し特殊であり、普段の授業では扱うことがないからである。それならば、普段の授業でも取り入れてみようということで、授業の中で全国学力・学習状況調査の問題を活用した授業を実践してみた。具体的には、1年生の比例・反比例の授業で、令和3年度の全国学力・学習状況調査⑦の問題を取り上げた。やはり問題の出題形式に全く慣れていないため、どのように解答して良いかわからない生徒が多かった。しかし、実践してみる価値は十分にあると感じた。今後も、定期的に全国学力・学習状況調査の問題を扱っていきたいと思う。そして、今の1年生が2年後に全国学力・学習状況調査を受けたときに、今の2、3年生の結果と比べて、記述式の正答率に違いが出ることを期待したい。



3 おわりに

これまで様々な実践をしてきて感じたことは、「考える力」を高めるためには、普段の授業の中で自ら思考し、表現する場面を生徒にどれだけ多くつくることができるかということである。これからも研究し続けていきたい。



授業づくりのヒントは近くにあり!! 子供の言い訳から学ぶ、深め合う授業づくり



四街道市立吉岡小学校教諭 ひらさわ 平澤 あきおみ 昭臣

1 はじめに

主体的・対話的で深い学びが繰り広げられる授業に必要なことは何か。教師の永遠のテーマである。私も常に試行錯誤をしながら、日々授業づくりを行っているが、意外なところにヒントがあることに気づいた。それは、我が家における子供たちの父親に対する言い訳である。

我が家では、父親である私が子供たちに注意をすると、必ず「でも」「だけど」「なんで」という言葉が返ってくる。素直な返事を聞いたことはまずない。そのような言葉が返ってくるので、父親として我が子に「でも」「だけど」「なんで」に対してわかりやすい、そして納得する話を一生懸命考える。この瞬間こそが思考の深まりである。そして、自分なりの考えをまとめ、相手に納得するまで話す。このやり取りを授業で行うことができれば、より考えが深まり、活発な意見交換が行われる授業が展開できるのではないかと考えた。以下、「でも」「だけど」「なんで」の使い方のルールや実践例を紹介する。

2 実践内容

(1) 友達の意見に対する反応の確認

私の実践は、ただ一つ。それは、「でも」「だけど」「なんで」というキーワードをいかに授業で子供たちに広げてもらうか、それだけである。ただ、何でもかんでも「でも」「だけど」「なんで」と言えばいいわけではない。「でも」「だけど」「なんで」以外の発言も大切にしたい。私のクラスでは、友達が意見を

発表したときの反応で「同じです」「いいです」「など」と言いたいという決まりはない。友達の意見を聞いて、自分なりの反応の仕方をするように声を掛けている。共感できるのであれば、「そうだね!!」、驚いたときには、「おお～!!」、すごくいいなと思ったときは「拍手!!」など、子供たちは感じたままに反応する。そうすることで、型にはまった授業から、子供たち自身で作りに上げていく授業の雰囲気ができあがっていく。

表1 子供たちの反応例

「いいね」「なるほど」「たしかに」「そうそう」 「おお～」 「そうだね」「拍手」など

(2) 「でも」「だけど」「なんで」の注意点

子供たちには、「でも」「だけど」「なんで」という言葉を使うにあたって注意しなければならないことを2つ伝えている。それは、「使う前に必ず相手の意見を認める発言をする」と「使い方が間違っていた場合、先生が止めることもある」である。「〇〇さんの意見も良いのだけどさ～」「〇〇さんの意見もすごく良くわかるよ。でもさ～」など、相手の意見をまずは認めることで、共感的な雰囲気をつくることができる。「止めるポイント」も明確で、「でも」「だけど」「なんで」が思考を深める問いになっているかということだけである。意地を張っているだけ、感情的な「でも」「だけど」「なんで」になっている場合、教師がきちんと止めることで、正しい「でも」「だけど」「なんで」の使い方を学ぶことができる。はじめは、感情的になっている子供が

いたとしても、「間違えではなく、それだけ授業に熱中しているという証拠だね」と、声を掛けるだけで子供は喜んでくれる。どんな発言をしてもまずは褒めていくことを心がけた。止めるかどうかの判断は感覚的で、難しい面もあるが、実践していく中で教師、子供ともに感覚を掴み、成長し、自分たちのクラスがより深まりのある学びの場となることで、さらなる学習意欲の向上に繋がるといよいよサイクルを生み出していくことができた。まずはやってみることが、お互いの成長に繋がることも実感した。

(3)大切なノート整理

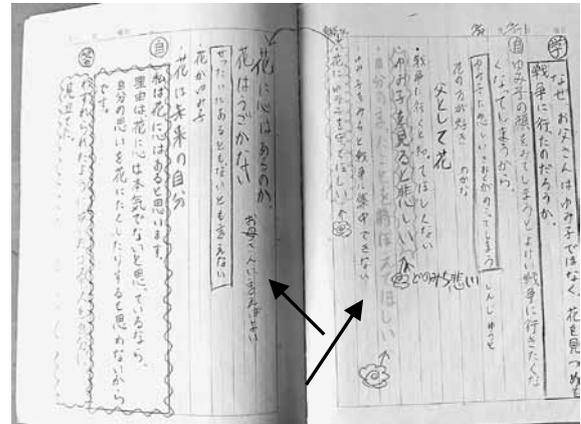
どの教科の授業においても常に「でも」「だけど」「なんで」のキーワードを活用した授業づくりを行ったことで、子供たちは授業で活発な意見交換ができるようになった。一方で、意見を言って終わりではなく、黒板に自分たちの意見が書かれた後は、必ずノートにまとめる時間（7分～10分程度）をとるようにしている。板書を写すとき、子供たちには3つのポイントで指導している。

- ① 時間内に書き写す
- ② 全て書き写すのではなく、キーワードにしてまとめる。（難しい子供もいるので、まずは全部書き写すでも可とする）
- ③ 書き写す中で、自分のつぶやきを書く

流れるように意見交換が行われると、思考の整理ができない子供も多い。大人でさえ、静かな時間の中で、判断するということがよくあることである。子供たちには、「ノートにまとめる時間＝静の時間」という認識をもたせ、この静かな時間（書いている鉛筆の音だけが聞こえる空間が理想）で思考を整理するようにしている。最初は、ただ書くだけで精一杯だった子供も、慣れてくると、だんだん時間内に自分のつぶやきまで書けるようになってくる。また、なかなか授業で発言でき

ない子供は、ノート指導で活躍の場がもてるように支援している。

つぶやきを書いている子供のノート



3 実践例

以下、4年生道徳「絵はがきと切手」の授業の実践例を簡単に紹介したい。

教師の問い⇒「自分がひろこさんなら、友達に料金が不足していたことを伝えますか」

最初、伝えるという意見が多かったものの、「友達がまた同じことをしてしまうから」など、あまり深みのある理由は出なかった。

深まった児童の発言⇒「友達に料金不足を伝えるということも大切だけどさ、本当に友達を目の前にして、伝えることできる？」

この意見に対して、「本当の友達だからこそ、伝えるべき」という意見が出た。そこからさらに「本当の友達だからこそ、伝えない」という意見も出て、多くの子供の中に「本当の友達とは何か」という思考の深まりが見られ大議論となった。

4 おわりに

まさか、我が子の言い訳語録が、授業づくりのヒントになるとは思ってもみなかった。

生活の全てにヒントはある。これからも、子供たちが「もっと発言したい」「授業が楽しい」と思ってもらえるような授業づくりを心がけていきたい。



学習意欲の向上が 生徒の主体性を引き出す



柏市立土中学校教諭 やなか 谷中 まさゆき 正幸

1 はじめに

コロナ禍を経て、子供たちが「自ら進んで学ぶこと」の重要性が注目された。そこには学習するための課題がないと、「自らは学ぶこと」ができない子供たちの姿があった。このことは報道されたこともあり、子供たちが主体的に学ぶ姿勢を身に付けることの大切さを1人の教員として痛感した。

子供たちが、「自ら学ぶこと」を実現するには、学ぶことが「楽しい、面白い」ということをきっかけに、「もっと知りたい、やってみたい」という子供たちの内側から湧き出る意欲を高めていくことが必要である。

子供たちの学習意欲の向上を目指すためには、「子供たちに任せていく場面が多い」授業を実践する。自分で取り組む学習活動を増やしていくことで、その先に協働的な学びを経て、深い学びにつながると考える。そのため、子供たちが主役の授業を実現することが最初の一步であると思う。

2 実際の授業から

「自ら学ぶこと」を実現するには、生徒に任せることが大切である。しかし、教師側は任せていくことと丸投げすることの違いを理解することが大切である。「任せる」には、指示と自由の範囲が明確である必要がある。反対に、「丸投げ」は、指示があいまいなことが多い。そのため教師側は、学習内容のゴール地点を確実に示し、そのゴール地点にたどり着くための「学びの地図」を子供たちに提示することが、ファシリテーターとしての役

割の一つである。

(1)授業+課題学習

子供たちが「自ら学ぶこと」を習得するために、1学期の前半に行う授業形態が、授業+課題学習である。授業時間の前半が、子供たちが教師とのやり取りから資料の扱い方を学ぶ段階である。後半では前半の学習内容の確認や発展的な課題を設定する。この段階では、班を中心としたグループでの課題解決に取り組む。

課題学習では、教師は子供たちの取り組んだ成果をハンコなどで評価を行う。個人の評価ではなく、グループ全体の評価を行うことで、苦手意識のある生徒の学習意欲を高めることを目指す時期である。

(2)課題学習

1学期の後半に行う授業形態が、課題学習である。この頃は、資料の扱い方についてある程度学習したため、教師が学習課題を確認した後は、課題解決に向けて子供たちで学習を進める。学習方法は生徒が選択する。個人か、グループか、と学び方を選択できることは、必要な時に必要な学び方を選択する力を養うことにつながる。

評価に関する課題として、個人評価の場面を増やすことで、ハンコ等の評価を時間内に獲得できない生徒が一定数生じることが挙げられる。その対策としては、授業後にフォロータイムを設定して対応する。個人評価になることで、課題解決が達成できずに学習意欲が低下する生徒を支えることが目的である。

(3)自由進度学習

この授業形態は、単元の学習課題を設定し、単元を貫く課題で学習内容を活用して、まとめる作業を設定する。

子供たちが自ら学ぶことを実現するための「自由進度学習」を行うには、ファシリテーターとしての教師が、子供たちが迷わないように、「学びの過程を示した地図」を提供することが必要となる。

公民教科書P6～23 現代社会の特色と私たち・私たちの生活と文化	
1 (ロングレッシン) 2030年、日本はどのような国になるのか？ →現代社会の特徴をつかみましょう！	見直し・問いをもつ
2 【自由進度学習】ミニレッスン5分 振り返りの時間5分 【単元を貫く課題】2030年、日本はどのような国になるのか、預言書を作成しよう！ →スライドで作成すること。(全3ページまで) 【チェックポイント】 ①現代の日本の社会にはどのような特色が見られるのだろうか。(P8～17) ②伝統や文化は私たちの生活にどのような役割を果たしているのだろうか。(18-21)	学習サイクルを回す
3 ③多文化共生を実現するために、私たちが取り組むべき課題は何か。(22-23) 【確認テスト】※2～4の時間内であればいつ受けてもOK	
5 まとめの発表と学びの振り返り(持ち時間1人5分程度) 【単元を貫く課題】2030年、日本はどのような国になるのか、預言書を作成しよう！ →各組で、個人で作成した預言書を発表しましょう！	伝える・共有

自由進度学習のための学びの過程を示した地図

特に自ら学ぶことに不慣れな子供たちは、何をどのように学習すればよいか判断できないことが多い。そのため、取組初めは生徒の学びを誘導するようなチェックポイント(必ず学習してほしいこと)を示すことで、不安感を和らげ、学習に集中できるようにする工夫が必要である。

子供たちが「自由進度学習」に慣れてきた頃、チェックポイントを教師側から示さず、教科書のページごとに「何を学ぶのか」「どんなことをわからないといけないか」についてグループで情報を共有することで、生徒たちが各自でチェックポイントを設定し、課題解決に取り組むという、個別最適化を目指した授業を展開する。

この授業形態では、子供たちが自ら選択し、

決定する範囲が広がる。子供たちの興味関心に基づいて詳細に調べることも可能であることから、意欲的に学習を進める様子が見られた。

大日本帝国憲法と日本国憲法との関係について	憲法の重要性	平民主権のために何をしているか	日本国憲法の特徴と大日本帝国憲法との関係について	2つの憲法にどうなるべきかという問いを掲げよう	日本だからその憲法	国民主権に変わった理由	憲法の形式が変わった理由	それぞれの憲法の悪い点と良い点	日本国憲法施行までの道のり
国民主権の必要性	人権の保障	基本的人権の尊重とは	憲法を作ったGHQの作ろうとした日本の有様	憲法による国民への影響	平和主義とは	天皇の国事行為	憲法の三つの基本原則	日本国憲法と大日本帝国憲法の相違点	子供の権利、人権、基本法
日本国憲法が今もなお生きていてくれる理由	日本国憲法の土台	なんで天皇作った	日本国憲法の特徴	自治体ごとに何をやっていくのか	国民主権とは具体的にどうなるのか	天皇が主権者から象徴に変わった理由	権利の重要性	三権分立を採用	憲法で重要なポイント
仏教の憲法を調べよう	それぞれの憲法を比較しよう	樹立点から思想の違いを見よう	その憲法の目指すものを見よう	天皇と憲法の関係	法の下の平等の重要性	大日本帝国憲法の特徴	人権と憲法は関係があるのか	三権分立の仕組みと利点	それぞれの憲法の重要点とところ
日本の政治のしくみ	国民主権と日本国憲法との関係性	憲法を作った理由	大日本帝国憲法について見よう						

チェックポイントづくりのための情報共有

3 おわりに

私は子供たちが「自ら進んで学ぶこと」は、一朝一夕にできるようなものではないと考える。だからこそ、教師として手立てを考え、子供たちに学び方をつかませていくための工夫が必要である。教師の工夫によって「正解のない問題・課題」に果敢に挑戦する未来の大人の姿が、子供たちから見えることがある。その姿に私は、頼もしさを覚えるとともに、日々の実践の大切さを感じる。

社会の情報化が進み、教師もその恩恵を受けて多くの授業実践を手軽に入手できる時代になった。社会の変化から多くの授業方法やネタを持っている教師より、目の前の子供たちに合わせた授業方法を選択できる教師が、これからの教師としての一つの在り方と思う。

【参考図書】

- 「協働する探究のデザイン 社会をよくする学びをつくる」著者 藤原さと(2023年5月24日)
- 「超具体！自由進度学習はじめの1歩」著者 難波駿(2023年2月24日)